

バトラー博士の慧眼と見識

金平輝子

Teruko Kanehira

日本司法支援センター顧問

私がバトラー博士と初めてお会いしたのは、1994年にNYで開催されたシンポジウムに参加した折のことです。シンポジウムのテーマは「活力ある高齢社会を目指して」で、日米の専門家が自国の現状と課題について話し合うというものでした。

当時東京都副知事の職にあった私は、主として都市に暮らす高齢者の生活の視点での発表を行いました。

東京都老人総合研究所の調査からは、定年後も就労や趣味あるいは生涯学習への意欲が活発でありながら、半面加齢に伴う介護への不安を抱えた高齢者像が浮かび上がってきていました。また高齢者のみ世帯が急増することもあり、介護の社会化を推進するための取り組みや、個人、家族、地域社会の意識転換が必要であることなどを特に強調した記憶があります。

社会福祉が専門の行政担当者としては、弱い立場の高齢者支援に心を砕き、そのために有効なプログラムの立案に心血を注いできましたから、東京都の取り組みがアメリカ人にどのように受け止められるのか、興味深い気持ちがありました。

ところがバトラー博士の基調講演は、そのような私にとってはまさに衝撃的なものでした。博士は、高齢者は弱い存在としてひとくくりで語られるべきではないこと、一人一人が自立して自分の可能性を追求できる意思と能力を持っていることを繰り返し語りかけられたのです。

高齢者の経験と知識や見識を有効に活用することが社会の活力を生み、また財産となると力説される博士の力強いスピーチは、国連障害者の10年を締めくくる会議における「我々に支援ではなく労働を！」という障害者からの力強いアピールとも重なって見えました。

65歳以上が人口の三分の一に近づきつつある日本で、高齢者の能力や経験を活かせないとしたら、どれだけの損失になることでしょうか。

あれから16年が経過し、私自身も80歳を過ぎました。

これまでと同様に社会と関わりを持ち、自分の経験や知識で社会に貢献することでできれば嬉しいと思うにつけ、改めてバトラー博士の慧眼と見識に感服する思いが強まるばかりです。



1994年、「活力ある高齢社会を目指して」(NY)で発表する筆者